

新年度の取り組みから

分かりやすいことばで、文化を語りたい

——文化の協同 96年11月 東北——

荒木 昭夫 (東京都/日本児童・青少年演劇劇団協議会事務局長)

はや2年になる。

「いま『協同』を問う94名古屋集会」から数えてである。あのとき、沢山の宿題が出た。

その宿題が片づいているか。もうその時が来た。

当時の感想が書き残されてある。

「かみ合わない。テーマを『文化の経営と仕事おこし』とすればどうか」

「文化の協同。今必要な基盤作りと組織作りを。そのシュミレーションを」

「文化の違いは価値観の違いだ。だとすると文化で協同はできるのか」

「ああ、議論がたりない！」と。

我々は、我々が携わっている今の仕事を「良い仕事」だと自覚する。それは「社会的に有用な仕事」だとも自負をする。しかしそれを社会がどう評価しているか、については、否定的であることが多い。見返ってくる「お金」があまりにも少ないので、やはり「評価はないのだ」との思いに落ち込んでしまいそうになるからである。

「『よい仕事』とはその公共性がどれだけ高いかによっても試される」との富沢賢治氏の発言もあった。真に公共性があるなら、国民はこれを支持し、支援する筈であろうからである。

我々の仕事の公共性は、ではどの程度なのか。

「協同の運動と事業経営が現代の資本主義市場経済というシステムに、どう対抗する位置を占めるのか」「協同運動の中軸をなす『労働協同』の自身とはなにかについて」……解明していきたい、という広瀬謙一氏(研究会報・創刊号/あとが

き)の期待に答えて、具体例を提示して、96全国集会の課題に挑もう。

では、どんな具体例がならべられるか。

東北地方にあって、わらび座の果たした役割は大きい。この集団の仕事について否定的に語る人は少ない。だから当然今回の集会の基盤には、わらび座の活動は位置付けられる。がそれ以外にも目立たないが、知られていてほしいものも多い。

その活動の分析を参加者みんなですて見たいという思いが募る。

一つは劇団風の子東北事務所の活動である。

その拠点は喜多方。福島県北西部会津盆地北部、漆器・清酒など従来の工業が発達、人口37,000の町と紹介されている。

劇団風の子は1950年に東京世田谷代沢にあって、児童文庫などの子ども会活動を以て出発とした。

75年には児童演劇での初めての海外フェスティバルに招聘され、世界的にも有名な劇団に成長した。80年代半ばに入って、地方毎に劇団を分岐させ独立させるという方向を持った。その中の一つに「劇団風の子東北事務所」がある。

彼らは「地域の人達と芝居を創る」という。

「狸はつらいよ」という作品がある。廃校になった雄国村の小学校を稽古場に借り受け、住民の声を聞いて創ったものだ。ここの特産品は竹細工。竹の箆だ。だから芝居の小道具はすべて竹を編み上げて作る。3人の俳優は喜多方の産。住民参加だ。こうした人間の関係をその創造の拠点に

創って、年間に200回の公演をこなす。そして地域特産の竹の箆も販売する。

だから当然、その町の文化センターとは関係が深い。その町、喜多方プラザ文化センターの活動も紹介されてしかるべきだ。その町のキーマンは薄崇雄氏。舞台音響技術士でもある。

普通、市民劇場など公立文化施設がその自主事業として「演劇」などを制作する時、有名俳優などから集めることが多いものだが、ここではまず、何を創りたいかを論じ、市民の必要度を計量し、そして出演者よりも先に裏方、スタッフから人材を固めて行くという。

彼らがNLCフェスティバルと言っているのは、会津地方の広域圏組合が主催するもので、New Life Circleの頭文字を取って命名したものだそうだ。そのフェスティバルとは、地域住民の自発的な諸活動が起こるなら、それを横に繋いで他の団体を巻き込んでいくようにと助言する。住民からの企画が出されると、それを更にグレードを上げるために補助金を付けるという立場をとり、住民と、自治体と、専門家との三角錐を作り上げるのだという。

子ども劇場・おやこ劇場運動は30年になる。

会員は90年時点、全国で53万名を数え、前回の協同〈94・名古屋〉集会では「文化の協同という課題で最も成功していると思えるのは、児童協とおやこ劇場の関係である」と言われた程の「劇場運動」ではあるが、その後、少子化の影響を受けか、40万名近くにも減少していた。

しかしだ。喜多方の子ども劇場は、1,100人の会員を擁して、ここ数年その会員を減らしてはいない。その秘訣は何か。

遠野市民センターが創る市民オペラは既に20年の経験を積んでいる。最近では300名もの子どもたちと老人が出演していて、現在では子どもミュージカルという方が近いのだが、その創作活動も注目を浴びることとなった。

大沼郡昭和村の公民館活動も新鮮だ。ここは老

人人口では日本第2の高齢自治体で、麻の織物を作る数少ない村だそうだが、その技術を継承するために、織手技術者を公募する。村起こしはリゾート開発でなく文化の開発でやるのだという。今、文化の諸活動が都会型のものばかりが紹介され、宣伝される中であって、この村の活動は新鮮に写る。

さて。いま『協同』を問う96全国集会での、議論の柱を立てよう。

- ① 今日、文化の仕事起こしは、資本主義市場経済システムの中でどの位置を占めるのか。占めさせ得るのか。
- ② 文化的諸活動が公共の財を作り出す事業として、どこまで認知される状況を作り出して来たのか。
- ③ 「非営利・協同の時代」へさらに勇気を持って進んで行く気概とその実践を積むことについて。

そして今、文化の分野でもその時代が来た。

この次元での経験交流なら、大いに進めたい。

つまりどれだけ仕事を起こしたか。どれだけの人がある仕事に専門的に関わって、納得のできる収入を得ることが出来たか。その仕事を継続せしめ得る組織的体制を構築し得たか。……の実践とその交流である。

我々にとって欠落している実践は、その「事業」に自ら「出資」して参加するという行為である。

まず、出資しているか。出資したのなら、そのお金の行方を当事者として監視しているか。故に、その出資した事業の成長に関心が掛かる。その金が「不分割積立金」であると承知していてもである。

このとき人間の心の中には、集団の成長に拠金して行くことの意味が深く理解されていくのではないのか。

この課題で議論したい。そのそれぞれの発言、一つ一つが、市民のことばで語る現代日本の文化の実相となるからである。参加を乞う。